

新しい観光のかたちをめざして～観光分科会の活動

最近、旅行の個人化・高齢化・国際化が進むに連れて、観光行動の多様化が進んでいる。それに伴い、観光のニーズも例えば、6K（感動・教育・景観・環境・健康・寒地）といったテーマ性をもった新しいかたちの観光が生まれつつある。

観光分科会ではこうした観点から、平成19年度は産業・遺構観光および環境に配慮した新しい観光の取組をテーマに、これまで2回の勉強会を開催した。

1. 「炭鉱遺産活用と観光振興」

ゲスト：吉岡宏高氏（札幌国際大学観光学部准教授／NPO法人炭鉱の記憶推進事業団理事長）



●PROFILE／よしおか・ひろたか 1963年生まれ・三笠市出身。岩見沢東高卒業、福島大学経済学部経営学科卒業、札幌学院大学大学院地域社会マネジメント研究科修了。1986～1992年・日本甜菜製糖㈱で新規事業を担当。1992～1997年・㈱たくぎん総合研究所で主任研究員として道内各都市の地域計画・都市計画の策定に携わる。1997年にまちづくりコーディネータとして独立。現在は、札幌国際大学観光学部観光学科准教授

■産業を活用した観光振興の経緯・背景

1998年（平成10年）、国の支援施策の期限切れを目前に、北海道空知支庁が炭鉱遺産に着目した政策を開始、炭鉱遺産の存在状況について初の総合的調査を行った。その結果、多くの遺産があることが判明し、炭鉱遺産を活用した地域振興のマスタープランとして、「そらち・炭鉱の記憶コミュニティ・ミュージアム基本構想」が策定された。

2000年（平成12年）には、炭鉱遺産の重要性と炭鉱遺産を活用した地域活性化の可能性をアピールする政策が展開され、炭鉱遺産が人々の関心を引きはじめた。道の積極的な取り組みにより、新たに市民団体が組織化され、市民による炭鉱遺産を活用した具体的な活動の展開へ繋がっていった。

市民活動は、2001年（平成13年）の北海道遺産選定、2002年（平成14年）の民間主体による地域横断的な実行委員会組織の設立、2003年（平成15年）の赤平市での国際学会開催（国際炭山ヒストリー会議）などの動きに力を得て、次第に認知度を増してきている。

■産業を活用した観光振興方策の概要

炭鉱遺産は知名度の向上にともなって観光資源として注目を浴びるようになってきた。2002年（平成14年）10月からは、バス会社系の旅行代理店が定常的遺産ツアーを開始し、約2年で、1,000人を超える参加があったほか、大学・高校などの研修コースにも組み入れられはじめている。

観光対象としての炭鉱遺産の知名度は徐々に高まってきてはいるが、まだ地元住民や自治体にとって「いまだ炭鉱なんて」「炭鉱は過去のもの」という固定的な認識が強いことが大きな課題である。そこで、炭鉱遺産を一つの場（ステージ）として捉え、そこに様々な人が集まるような仕掛けが展開されている。地域外の人は、芸術や文化など炭鉱遺産に新たな価値を加えることで来訪の動機を持ってもらい、一度訪れることで炭鉱の幅広さ、奥深さに触れてリピーターになってもらうことができる。地域内の人は、外から人が来るということを契機に、炭鉱遺産の価値を実感してもらう。ここから、北海道の歴史にとって炭鉱は重要な存在であったという過去の価値とともに、炭鉱遺産は新たな活用価値を持つ

